語構成から見る中日のパソコン用語の特徴

# はじめに

## 研究背景

現代社会では、学習や仕事などにコンピューターは欠くことができないようになっている。プロだけでなく、コンピューター用語は日常生活にも浸透してきた現状である。特に一衣帯水である中日両国は経済を含め、数多くのコミュニケーションを行っている。コンピューターを用いる場合がきっと多いと思われる。それで、中国語と日本語ができる、専門的なIT技術を持っている人材は数多くの中日関係の会社に求められている。だが、実際に日本語勉強の経験者でも、日本語環境のパソコンの操作はそう順調ではない場合がある。

## 研究意義

上述のように、中日は漢字文化圏の国に属しても、日本語はカタカナ表記や省略の特徴があり、中国語は殆ど漢字表記の特徴がある。だから、中日両国の言語学者はパソコン用語のような専門用語を勉強する時に非常に大変であったという声もよく出てくる。更に、中日両国の熱いコミュニケーションに伴い、来中或いは来日の留学者や就職者が日々増えている現状で、パソコンを操作することを避けるわけにもいかなくなった。中日のパソコン用語の習得からそういう人々を支援するために、中日パソコン用語の比較を研究する必要があるではないかと思う。

## 先行研究

中国語のパソコン用語については、楊（2000）は中国語のパソコン用語の源と分類について研究された。専門用語の面で「ハードウェア用語、ソフトウェア用語、インターネット用語」と分けられた。赵・徐（1998）によりパソコン用語が始めて中国に渡来した時に主に科学技術開発センターのような組織に利用され、抽象、正式という専門用語の特徴があることが分かってきた。特に揚・後藤（2003）により中国の大陸、台湾、香港のパソコン用語表記がそれぞれ違うことも始めて分かってきた。

日本語のパソコン用語の特徴については、後藤・深澤、・窪田（2002）はコンピューター画面出てくる言葉は主に中上級レベルの語であること、その多くは漢語、外来語、省略語であったり、カタカナ表記、アルファベット表記が混用されたりすることを明らかにされた。「一語、複合語」という大まかな語構成の分類を提出された。同じように、深川・窪田・深澤（2007）は実際にソフトウェアに出てくるIT用語は漢語が４割、外来語が３割を占めていることを改めて具体的に提出された。そして省略の傾向があることが分かってきた。もっと具体的な分類については濱田・深澤・翁（2012）により提出された「漢語、和語、外来語、混種語」である。日本語のパソコン用語はほぼこの4種類の語により構成されたことが分かってきた。

以上で、筆者が集めた資料の中で中日のパソコン用語比較についての研究はなかった。別々に一言語の研究或いは中英、日米の比較研究をされた。それらを補充することで、時代に伴い、前の結論を検証する気持ちを持ちながら、本研究を進みたいと思う。

## 研究方法

本稿では、中日のパソコン用語に対し、語構成の視点から中日のパソコン用語の特徴を見出す。計量語彙論の方法で新しい言語事実を明らかにしたいと思う。肝心な研究対象が『日経パソコン用語事典』（2011版）から抽出した中国語1690語と日本語1773語である。まず中国語のパソコン用語の特徴を見出し、それから日本語のパソコン用語の特徴を見出していく。最後に中日のパソコン用語の特徴を見合わせ、相違点をまとめる。そしてこの現象の原因にも触れようとする。そういう流れで展開したいと思う。

# 扱うべきデータ

パソコン用語と言っても実は大幅な範囲があり、強いて言うと、パソコンはITという分野に属する。だが、ITというデジタルカメラやスマートフォンや家電やインターネットなど様々な分野が混じられている。即ち、相互に影響を与え、知識が共通している。今の時代に、デジタルカメラでも、スマートフォンでも、パソコンに繋げることが一般になり、インターネットを経由し、家電などをコントロールすることも可能になる。ついでに、そのような家電が「スマート家電」と呼ばれることになる。

ということで、今回の研究が扱うべき語は大幅になるけど、日経BP社により、『日中パソコン用語辞典』が出版され、パソコン、デジタルカメラ、スマートフォンなどの電子製品に関わる用語が含めされている。中国化学工業出版社との連携で、翻訳版の『中英日電脳用語辞典』も出版された。本稿での全ての研究はこの翻訳版の2011版を基に展開していく。

その辞典のおかげで、扱うデータが大幅に絞っているけど、全体4560語もあり、そしてパソコン用語だけでなく、ほかの専用語も混じっているので、研究の一般性を最大に保つ上で、4560語から1690語の中国語と1773語の日本語を抽出することになった。「中国語」―「日本語」という対訳の原則であったけど、中国人に対する日本語原版から翻訳され、中国語を索引にしたせいで、一つの中国語は複数の日本語が対訳されている。例えば、「解压缩」という中国語でも、「伸長」、「展開」、「解凍」という三つの日本語が対照されている。そういうわけで、日本語が中国語より多くなった。そして語を選ぶ標準は出来るだけパソコンに関わる語を選ぶことである。日常生活に耳に慣れる語と慣れない語両方とも揃えている。

そして、データを数量化するために全ての語を「中国語」―「日本語」のような形式でエクセルに入力しておき、分析プロセスが便利になることである。

# 中国語のパソコン用語の特徴

今回『中英日電脳用語辞典』から抽出された1690語の中国語のパソコン用語を研究してきた。マイクロソフトの表計算機能を持ち、様々な構成要素を分析してきた。3.1から詳しい説明を行う。

## 中国語のパソコン用語の詞頻度調査

オンライン「字詞頻度統計」ソフトを利用し、中国語のパソコン用語の1690語の中で各単語の出現回数を分析することができた。結果は出現回数が最も多い50語を表１のように示している。



表 1

オンライン「字詞頻度統計」ソフトでは主に詞の出現回数を分析したが、詞の定義はソフト自体に定義されたのであるため、必ずしもパソコンに関する用語ではない。データの曖昧さを回避するため、そのソフトの分析結果の上で、自分で修正したことがある。助詞と副詞などパソコン用語に直接な関連性がない語を削除した。残った語は殆どパソコンに関連性が強い詞或いは各構成要素を繋げる接辞である。これから幾つかの例を上げ中国語のパソコン用語の特徴を説明する。

## 一位の「软件」について

第一位は「软件」で、出現回数は総合で58回である。特にここの「比率」は「出現回数/1690（抽出された語の総数）」から計算された結果である。分解された一つの詞は一項目の語に二回出現することは殆どないから、こういう便利な計算方法を用いたわけである。　さて、「软件」は一位であることは不思議であるとは思わない。パソコンは「硬件」（ハードウェア）と「软件」（ソフトウェア）を基本要素に構成された機械であるから、「软件」がよく使われるのは当たり前であるが、「硬件」の使いはなぜ少ないか。1690語の中国語のパソコン用語の内訳を見ると、「硬件」は一例しかなかった。それはちょうど「硬件」である。「软件」の例が相当あるが、そのまま「软件」だけで成った語の他に、殆ど「接尾語」として使われている。例えば、「安全防护软件」「传真软件」「地图软件」「恶意软件」「间谍软件」「图形软件」「系统软件」「压缩软件」「杀毒软件」「行业软件」などの例がある。その強い造語力が示されている。

「软件」との意味大体同じであった「程序」は12回出現した。調査すれば「软件」と同じ位置で殆ど「接尾語」として使われている。例えば、「安全更新程序」「安装程序」「汇编程序」「下载程序」「子程序」などの例がある。実は上の例に出た「程序」を「软件」に変えれば通じる。例えば、「安装软件」「汇编软件」という用法もある。だが、「子软件」という言い方は使われていない。さて、「软件」で構成された語を「程序」に変えてみると、同様に通じる。例えば、「安全防护程序」「恶意程序」「杀毒程序」という言い方もある。「软件」の使用頻度が「程序」より高いのは「程序」が「软件」よりもっと専門的なニュアンスが含まれていることにあると思う。資料を調べると、「程序」は「为了得到某种结果而可以由计算机等具有信息处理能力的装置执行的代码化指令序列，或者可以被自动转换成代码化指令序列的符号化指令序列或者符号化语句序列 (中国国務院, 2013)」。「软件」は「指计算机程序及其有关文档 (中国国務院, 2013)」。こう見ると、「程序」はただコンピューターに対する命令の集合である。「软件」は「程序」を含め、及び関連したドキュメントを含めた集合である。言い方を変えれば、「程序」は主に開発環境に用いられ、「程序」は主に「本番環境」に用いられる。「软件」の範囲が「程序」より広いわけである。即ち、大衆に受け入れられやすい、理解やすい語がよく使われている。

## 第二位の「器」と第三位の「多」について

第二位の「器」と第三位の「多」がとても気になる。この二つの語は「接語」であるため、他の語より出現回数がかなり多かった。具体的な例を挙げると、「器」は「本地路由器」「编辑器」「编码器」「编译器」「浏览器」などの例があり、「多」は「多处理器」「多窗口」「多核」「多线程」「多媒体」などの例がある。

例からみると、「器」と「多」は最もよく使われている「接尾語」と「接頭語」である。「器」を含めた例で、「器」は大体「工具」（ツール）に当たる。例えば、「编辑工具」「编码工具」でも実際に使われている。ただ「器」は「工具」より短く、理解も安いから、「器」を使う傾向が高くなったと思う。中国語の省略の特徴が見られる。

「多」は大体日本語の「マルチ」に当たる。コンピューター用語の分野で一般的に「機能が多いこと」を指す。これはコンピューターの急速な発展に深く関係があると思う。1945年に世界初のコンピューターENIACが誕生したが、その時「巨大頭脳」 と称された。機能の単一で、アメリカ陸軍の弾道研究室での砲撃射表の計算向けに設計されたのである。だから、コンピューターの最初の目的は人間の代わりに複雑な計算を行うことである。集積回路の発明に伴い、コンピューターも爆発的に発展してきた。特にマルチプロセッサーの技術により、コンピューターの機能は計算だけでなく、それぞれの機能が付けられた。コンピューターが小さくなりつつあり、機能が多くなる。それは「多」という接頭語が多く使われるようになる理由ではないかと思う。「多」からこの時代のコンピューターの特徴が窺われ、中国語のパソコン用語は時代とともに進歩している。

## アルファベット表記の「PC」について

もう一つの「PC」はアルファベット表記である。五十位内にアルファベット表記で唯一である。「PC」も近年で個人パソコンの普及に伴い人々に知られてきた。特別な説明がないと、中国語で「PC」、「电脑」「计算机」は同じ意味である。教育普及の伴い、国民の教育水準と英語力が増えている一方、前の漢字語彙から段々アルファベット表記である原語をそのまま使うようにになった。「PC」の他に、「WiFi」「CPU」「IE」「Windows」など新たにでた語或いは元々漢字語彙の訳文があった語が近年でアルファベットのままで流行ってきた。もう一つの原因はアルファベット表記の便利さにあると思う。もしアルファベットのままで通じれば、洗練されたアルファベットがよく使われるのは将来英語の普及に伴い中国語のパソコン用語の傾向であると思う。

## 動詞の「输入」と「访问」について

表１に載った語には動詞が幾つか入ったが、実際に品詞の分別が曖昧であり、殆ど動詞と名詞の機能が持たれている。ここで典型的な「输入」と「访问」を通じ説明する。

「输入」はそのままで使われることができるが、「部首输入」「假名输入」「输入设备」など他の語と組み合わせ新たな語になることが少なくない。「输入」の位置により、新たに出来た語の品詞が違う。一般的に前に位置付ければ名詞が生まれ、後に位置付ければ動詞が生まれる特徴がある。即ち、修飾語と被修飾語の差がある。

「访问」は「输入」より出現頻度が少ないが、同じ特徴が持たれている。「访问控制列表」「访问码」「远程访问」など結合された語の数がかなり多い。違うところをあえて言えば「输入」は後に位置付ける傾向が強く、「访问」は前に位置付ける傾向が強い。即ち、それぞれの修飾語になる傾向と被修飾語になる傾向が違う。全体の中国語のパソコン用語にすると、動詞が他の語と結合し名詞化される特徴を推測することができる。これも中国語のパソコン用語の品詞の曖昧さを引き起こした原因であると思う。

# 日本語のパソコン用語の特徴

## 構成パターン

# 中日のパソコン用語の比較

## 構成要素の相違点

## 構成パターンの相違点

# 終わりに

## 結論

## 今後の課題